

住民意識に及ぼす河川スケールの影響

九州大学工学部 学生員○山本賢一 九州大学工学部 正 員 小松利光
九州大学工学部 学生員 内山裕三 宮崎大学工学部 正 員 杉尾 哲

1. はじめに

近年、都市環境のアメニティ向上を目的とした水辺の再生が図られて各地に様々な親水施設が誕生し、多くの研究も行われている。しかし、これら親水施設に対する住民の評価や行動が形成されるに至った背景については十分な議論が成されていないように思われる。そのため、これらの研究からは親水施設の一般的特徴は明らかになっても、周辺の住民にとってまたその地域にとって最も望ましい施設の形態に関して客観的な知見を得ることはできない。そこで本研究では、導水によって再生された都市小河川に対する住民の評価を近接する大河川との関連において分析し、住民意識に及ぼす河川スケールの影響を探ることとする。

2. 調査概要

調査対象として、宮崎県宮崎市の小松川を選択した。小松川は、宮崎市の中心部を貫流する小河川で、大淀川に寄り添うような形で住宅地域を流れて大淀川に合流する。かつては沢山の魚が住み、憩いの場として多くの住民に親しまれていたが、近年、主に沿川の人口集中による宅地化の進展と家庭排水の増加により、水質は悪化し悪臭を発する状態となっていた。そこで、水質の改善のために昭和59年には大淀川からのポンプ導水が実施された。しかし、河道や周辺の整備はまだこれからという状態で（下水道普及率64.8%）、住民には親水空間としてあまり認識されておらず、雨水排水路としての性格が強い。

小松川への送水元である大淀川は、自然に恵まれた九州第2の流域面積を持つ大河川であり、年間を通じて色々な伝統行事や祭りなどの場として、また日常生活における憩いの場として古くから人々に親しまれている。

図-1に両河川的位置関係及び調査対象地域の概要を示す。

調査（H1.10.9～11実施）としては、小松川の水源付近から河口までの長さ約5km、幅約500mの範囲にわたってアンケート調査を行った。調査表の配布数は500部で、回収率は90%であった。なお本調査では、サンプルの地理的偏りが生じないように、あらかじめ地図上で対象地域を幾つかのゾーンに区分けしてから住戸を個別訪問して記入を依頼し、後日回収した。

調査表の質問項目の内容を表-1に示す。本研究では小松川、大淀川に対する評価であるC、D、F、Gについての分析を行う。この内、C、Fは河川及び河川周辺に対して全般的な評価傾向を、D、Gは河川に対する多様な環境構成要素それぞれの評価傾向を把握する目的で構成した。以上の調査内容から、大淀川、小松川各々に対する住民の評価、及び大淀川に対する評価が小松川に対する評価にどのように影響するかを明らかにする。

3. 分析結果

周辺地域住民の大淀川、小松川に対する評価は、個別的で一人一人独特なものがあると考えられる。しかし、各々の河川に対して多くの人々が共通に抱えている評価の傾向性もまた存在するものと思われる。そこで、大淀川、小松川それぞれに対する共通の評価の差異を調べるために、総体的評価と個別的评价に分けて数量化Ⅲ類による分析を行った。結果を図-2に示す。なお、結果には小松川の評価に対する大淀川の影響を調べるために、「大淀川に親しんできた人」（図中▲で示す）と「大淀川に親しんでこなかった人」（同△）

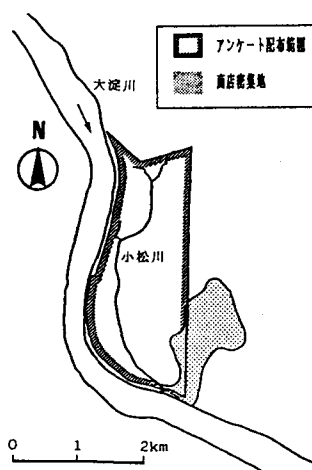


図-1 河川的位置及び調査地域の概要

表-1 調査表の内容

A	回答者属性
B	小松川の利用状況
C	小松川の総体的評価
D	小松川の個別的评价
E	大淀川の利用状況
F	大淀川の総体的評価
G	大淀川の個別的评价

、及び「大淀川周辺に満足している人」（同■）と「大淀川周辺に満足していない人」（同□）に分けて算定した小松川に対する評価も示している。また、総体的・個別的の分析のそれぞれに使用された評価項目は、図-3の〈スケールの意味〉に示してある項目に一致する。

これより、総体的評価、個別的评价共に大淀川と小松川は大きく隔たっており、大淀川に対する評価は小松川に対する評価よりはるかに良く、小松川に対する評価は悪い。

また、大淀川に対する評価別にみた小松川の評価は、個別的评价ではほとんど差異がみられないが「大淀川に親しんでこなかった人」のみが総体的評価において隔たっている。これは、個々の環境構成要因についての評価傾向がほぼ同じであっても、河川及び河川周辺に対する全般的な評価傾向は、隣接する大河川と住民との接し方に影響を受ける可能性があることを示唆している。

河川に対する評価には、個人差があるものと思われるが、そのような個人差が河川の評価にどの様に反映しているかを つぎに調べてみた。図-3は河川の評価を把握するのに使用した総体的及び個別的评价項目が、それぞれどの程度使用されたかを示した度数分布図である。

これをみると、(a)より総体的評価では大淀川に対する評価が明確で個人差はほとんどみられないが、小松川に対する評価はとくに明確というわけではなく、色々な評価を受けていることがわかる。これに対して(b)より個別的评价では、大淀川、小松川共に相対的に評価が明確で、大きな個人差はみられない。同様に、[大淀川に対する評価]別で小松川に対する総体的評価をみると、(c)、(d)より[大淀川に対する評価]の違いが小松川に対する評価の傾向に影響を与えていることがわかる。それに反して、結果は省略しているが、個別的评价の傾向にはほとんど影響がみられなかった。

4. 結論

大淀川に比べ小松川に対する評価は悪いが、その評価は明確というわけではない。同時に、個々の環境構成要素の評価の場合と異なり、小松川全般に対する評価には大淀川に対する評価がある程度影響しているものと考えられる。これは言い換えれば、小松川のように何ら周辺整備が成されていない小河川の場合、具体的な評価ではなく抽象的な評価に関してはスケールの大きい大淀川のような河川に対する評価が、隣接小河川に対する評価基準の一部になることを示している。

参考文献

- 1) 山下三平・元永 秀・平野宗夫：土木計画学研究・論文集，pp.195～202，1989
- 2) 加藤孝義：空間のエコロジー（新曜社）

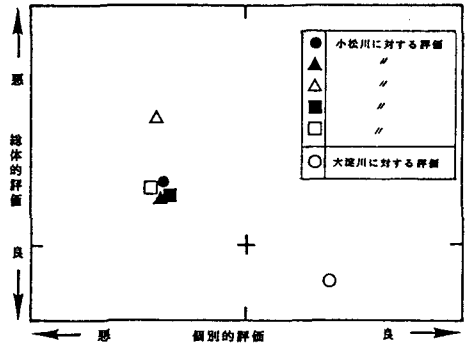


図-2 大淀川と小松川の評価の違い

〈スケールの意味〉

総体的評価

1. 関心ない
2. 親しんでこなかった
3. 生活にとって好ましくない
4. 周辺全体に対して満足していない
5. 関心ある
6. 生活にとって好ましい
7. 親しんできた
8. 周辺全体に対して満足している

個別的评价

1. 休息所・遊び場として重要ではない
2. 周辺の景色・雰囲気悪い
3. 水量少ない
4. 水辺に近づきにくい
5. 水が汚い
6. 休息所・遊び場として重要
7. 周辺の景色・雰囲気良い
8. 水量豊富
9. 水辺に近づきやすい
10. 水がきれい

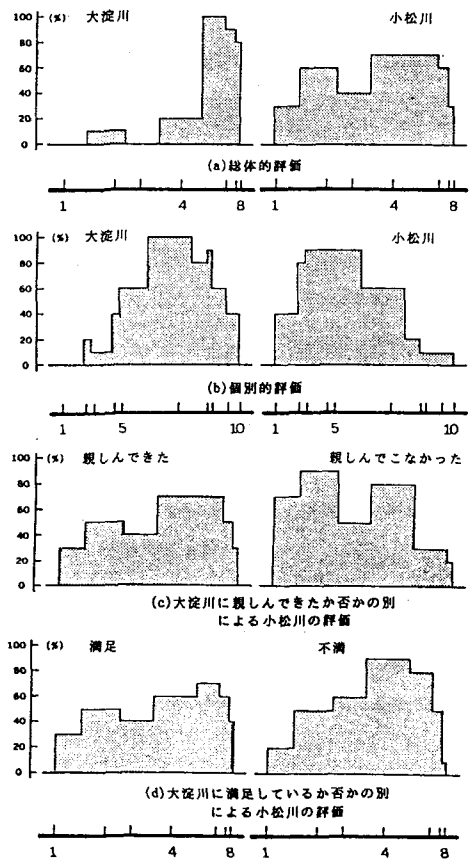


図-3 評価の明確さ、もしくは広がり